



あまの 天野 ころぞう 氏・論文賞

昭和3年12月22日京都市に生まる。府立三中をへて20年4月海軍経理学校へ進むが終戦により同年9月第三高等学校理科に転じ23年卒業、京都大学土木工学科を26年に出て日本国有鉄道に入社。下関工事局、大阪工事局、施設局土木課、建設局線増線、2年間の経済企画庁出向などをへて39年3月、東京工事局を最後に国鉄を退社、4月より京都大学助教授、41年3月学位をうけ41年7月京都大学教授（交通土木工学科）となり現在に至る。42年5月にハワイ大学で行なわれたPacific Conference on Urban Growthに出席のち、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ諸国の都市、大学、研究所を歴訪、都市交通、都市計画などの実情を視察して同年7月帰国。現住所：京都市中京区麩屋町竹屋町下ル

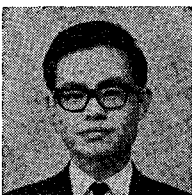
今から5年前に「東京診断—1千万都市の現実と将来」なる天野さんの新書版の本が新潮社から出されたことがある。文芸春秋や朝日ジャーナルなどの総合雑誌に買われた豊かな文才と、膨大な資料を駆使して、複雑なマンモス都市の機能に肉迫し、身近な現象を通じて問題点を浮き彫りにしたやさしい解説書としてマスコミにもかなり取上げられたのでご記憶の方もおられよう。本書が出される数年前から天野さんの都市問題に対する関心と勉強ぶりは定評のあるところだったから、今回の受賞業績への芽ばえは、10年以上前に存在していたと言えそうである。

経済企画庁出向時期を加えて13年間におよぶ国鉄ぐらしを退いて母校の教壇へ帰った天野さんは、ここ4年ほどの間に学位論文である「都市通勤交通需要の推計に関する方法論的研究」をはじめ、学会関係だけでも5編の論文を発表し、研究者としてはまさに油が乗りきった感じである。

「純粋工学ではない私の論文に賞が頂けたということは、土木計画学が土木の一分野として認められたものであることが、何よりも嬉しい」と感想を述べながら、現実の経済事象に対する応用試算のための電子計算機費用の捻出や、経済指標の統計データの収集難などには大いに頭を痛めたという。

これを機会に応用範囲をさらに拡大してゆきたいが、社会的事象の計量化という大きな壁に対するアプローチは、恐らく一生の課題と覚悟しているそうだから、息の長い研究成果が、これからも期待できるであろう。

「ひとの意見を尊重すること、ひとを傷つけないこと、を信条としていても、その実行が難かしくて…」と謙虚に語る豊かな常識人である天野さんにとって、仕事に追われて母上と奥様に三人の子供さんを交えた家庭団らんの時間が持たないのが何よりも辛そうである。



わだ 和田 ともみち 氏・論文奨励賞

昭和11年2月9日長野市に生まる。市立柳町中学校をへて29年3月県立長野工業高等学校を卒業し信州大学工学部に進み33年卒業後、大阪大学大学院に進学す。35年3月修士課程修了、38年9月博士課程修了、同9月工博の学位を受く。38年4月より電力中央研究所技術研究室へ入所、現在は土木第1部海岸水理研究室で研究生活を送っている。本年9月ロンドンで開催される海岸工学国際会議に出席のため海外初出張の予定。現住所：千葉県柏市旭町6丁目2番37 207（電研住宅）

実家が建設業を営んだので家業を継ぐつもりだった和田さんは、勉強を続けているうちに土木工学の面白さにひかれ、大学の3年頃には、すでに一生を研究生活にささげる決心がついていたという。そして4年のときには、当時はなやかな研究課題だった洪水波の研究に関して、その数学的展開の美しさにひかれ、固体力学より流体力学の方が未知の分野が多いと考えて“水”を研究の対象に選んだそうだ。

大阪大学では故田中 清教授、室田 明教授の指導で研究にますます磨きがかかり、業績も注目されはじめたところへ当時海岸水理研究室を作るために人材を集めて

いた電研にスカウトされたというが、良き指導者、先輩、仲間恵まれて、誠に幸運な研究環境にあると言えるよう。

今回の受賞対象となった冷却水関係の研究を4年ほど前に着手したときは、この問題に関する成果はほとんどなく、研究のスタートからダッシュまでの時間がかかったようだが、「結局は先見的知識にとらわれない研究が進められたように思う」と語ったようにマイペースを守る、この人らしい言葉であった。

海洋学、気象学、数学などにも非常な関心を寄せ、土木工学と関連分野との学問的領域の結合点を見出すような研究とか、また環境工学の分野に大いに注目していると若々しい抱負を述べ、「どんな小さなことでも研究上のオリジナリティーを尊重したい」ということを先輩のみならず自分自身にも言い聞かせている由。

スポーツ全般が好きでお酒も大好物という和田さんは強情なところもあるがサバけているという周囲の声に包まれて今後の研究が期待される。研究所近くの社宅に奥様と一男一女の四人ぐらしである。



ごうだ よしむ
合田 良実氏・論文奨励賞

昭和10年2月24日札幌市に生まる。市立一条中学校をへて28年3月、道立札幌北高等学校を卒業し、東京大学土木工学科に進み32年卒業、運輸省に入る。第二港建横須賀材料検査場に勤務し港湾水理の研究に従事、37年4月港湾技術研究所の発足とともに波浪模型実験、波力、波浪統計などの研究を担当、

39年4月水工部模型試験課長、42年5月より波浪研究室長となり現在に至る。その間36年9月よりマサチューセッツ工科大学(MIT)に留学、2年間の大学院生活を送り38年8月帰国。タイ国ヘソククラ港開発調査団員、大韓民国へ技術協力専門家として派遣された経歴もある。現住所：神奈川県横須賀市久里浜1-1-12

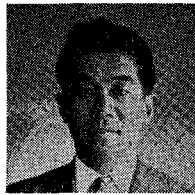
最近の学会誌に「表現の技術」という講座が連載されているが、この企画段階で一番頭を痛めたのが英文論文の記述法についての取扱いだ。この講座の重要な柱となるものだし、数多くの候補者が話題にのぼったが、結局は外国の大学でみっちりシゴかれてきた若手の研究者という線で合田さんの名前が最後まで残り、さんざん渋るのを無理やり押付けて書いて頂いたのが「英文論文の書き方、その1(53巻1号)、その2(53巻2号)」なのである。手をつけた仕事は途中で手を抜かないことをモットーとしている几帳面な合田さんらしく、大変な苦労を重ねられたようだが、内容がきわめて具体的で親

切という評判となり、編集委員会の期待に見事にこたえて下さったものであった。

「港研の仕事の中で与えられたテーマを追求しただけ…」と言いながら、受賞論文について、直柱に働く波力の論文は、やや粗雑だがアイデアとして応用性が広く、重複波圧の方はまとまり過ぎていて発展性にとぼしい、と自己分析する、おだやかな紳士である。

「国立研究機関の一員として、基礎研究と試験業務との中間に道を見出すことに困難を覚えながらも、やり甲斐を感じる…」とし、自分のものでもうまいかないのに…と頭をかきながらも「研究をまとめるときは結論が出るまで頑張ってほしい、また内容も現場で十分に使いこなせるように表現すべきでしょう」と後輩研究者への注文も忘れない。

東京へ出るのが面倒で余り機会はないといながらも学会の委員会には必ず出席する。絵を見たり、歴史とくに先史文明に関するものを読むことが好き…というあたり地味な性格がのぞける。研究対象である海に近い自宅に奥様、一男二女の五人ぐらし。



いとう しのぶ
伊藤 学氏・田中賞

昭和5年12月22日東京都に生まる。旧制浦和中学校をへて昭和24年旧制の浦和高等学校へ進み1年了後、東京大学(新制)へ入学、28年東京大学土木工学科を卒業、31年大学院修士課程修了、31年9月より1年間イリノイ大学に留学、34年大学院博士課程修了、工博の学位をうく。34年12月、東京大学講師、36年7月助教授となり現在に至る。前記のイリノイ大への留学のほかヨーロッパ、カナダ、アメリカなどで開かれたシンポジウム、セミナーへの出席などのため3回の海外出張経歴あり。現住所：埼玉県浦和市別所1-19-10

父上が元電発理事をやられた伊藤令二氏だから親子二人の土木技術者である。学部時代は水に興味をもち、卒論にも「開水路の限界レイノルズ数」を選んだが、大学院へ入るにあたり、平井教授のすすめで橋梁の研究を志し、同教授から与えられた示唆によって手がけた鉄道吊橋についての研究が、今回の受賞論文に連なる素地となったようである。

「田中賞の企画から軌道に乗るまでの設置や運営のお手伝いをしてきた、いわば当事者なのに賞をうけるのは何とも面映ゆい…」と語りながら、「今回の研究は大規模な実験をともなっただけに、多くの人々の協力があ

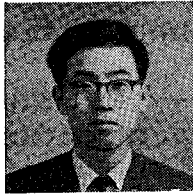
り、この点でも自分一人だけ取上げられるのは心苦しい」と続け、「共同研究者であり数年前に自殺された松原駿士君にも賞の一端を分けたい気持ち……」と顔を曇らせるあたり、誠実で真面目な人柄がにじみ出ているようだ。

これからは職業がら優秀な土木技術者の卵を育ててほしいとし、研究上のテーマとしては構造物の極限設計の実用化について努力したいという。

良い意味でのアマノジャク精神の持主と自認する伊藤さんの後輩への提言は「他人のあとを追うことにとらわれず、独創性を養うことに努めてほしい」ということだそうである。

16年にわたるスキー歴、6万キロをオフィシャルには無事故、無違反で走ったという車の運転、余り渋くない程度のクラシック音楽を聞くこと、やる方の野球、ゴルフなど趣味はきわめて広い。

学会でも多くの委員会に引張り出されているが今年はいよいよ書評小委員会委員長という大役を引受けている。浦和市の自宅に御両親とともに奥様、二人の小さいお嬢さんの6人ぐらしである。



岡村 ^{はじめ} 甫氏・吉田賞

昭和13年9月18日高知市に生まる。私立土佐中学校をへて32年3月、私立土佐高等学校を卒業、東京大学土木工学科に進み36年3月卒業、38年3月工学系研究科修士課程を修了、41年3月博士課程を修了、工博の学位をうく。41年4月より東京大学講師、43年4月より助教授として現在に至る。41年9

月より43年3月まで「ラーメン中における鉄筋コンクリート長柱について」テキサス大学で研究に従事、その間カナダのトロント市で開かれた鉄筋コンクリート橋に関するシンポジウムに出席、ACI年次大会にも参加す。現住所：船橋市薬園台町1丁目 薬園台住宅5の410

留学先のテキサス大学から3月に帰ったばかりで4月には助教授、そして今回の受賞と、研究者としては誠に幸先きのよいスタートぶりである。

「考えてもいなかったし困ったな」というのが岡村さんの正直な感想だが、書かねばならぬ論文の程度と、自分が書けそうな論文の程度との差に自信を失なうて大いに苦しみ、周囲の激励で何とかまとめ上げたのが今回の受賞論文だったそうだ。

岡村さんと野球との結び付きは古く、土佐中学のとき高知県野球大会で優秀選手賞をもらい、その後、土佐高

校、大学時代と野球に情熱を打ち込んできた。小柄な身体ながら、東大のエースとして何度か神宮のマウンドを踏んだことはまだ記憶に新しい。そして数年前までは東京大学野球部の助監督として実際に指揮をとっていた。本人は「コンクリートの研究よりも野球の方がずっと自信がある」と笑ったが、コンクリート界でも異形鉄筋の研究においては岡村の方法として多くの研究者が引用しているのをみかけるし、まだ創立間もない日本コンクリート会議の機関誌「コンクリート・ジャーナル」に発表された論文が受賞の対象となったことはコンクリート界発展のために大いに意義のあることであろう。生活信条として「誠意をもって自分の信ずるところに従って行動したい」、「またこの受賞を機会にいつそう勉学、研究し、よりよい研究者、教育者になりたいと思い、毎日少しずつでも努力していきたい」という岡村さんは、国分教授の指導のもとに今後コンクリート界のエースとして大いに活躍が期待されている。アメリカ留学を半年のばし奥様に一生分のサービスをしてきたという氏は家庭では一女のやさしいパパである。

(以上の記事執筆は事務局編集課が担当)

土木学会出版案内

編著者名	図 書 名	判型	ページ数	会員特価	定価	送料	備考
土木学会編	コンクリート標準示方書【昭和42年版】	B 6	446	800	1000	100	
同	コンクリート標準示方書解説	A 5	354	1000	1300	100	
同	ディビダーク工法設計施工指針(案)	B 5	88	500	700	70	
同	MDC 工法設計施工指針(案)	B 5	94	500	700	900	
同	夏期講習会資料	B 5	127	700	900	100	
同	プレストレスト コンクリート 設計施工指針	B 6	124	250	350	90	
同	人工軽量骨材コンクリート設計施工指針(案)	B 6	53	250	300	50	
同	プレバッド コンクリート施工指針(案)	B 6	38	180	220	50	
同	鉄筋コンクリート工場製品設計施工指針(案)	B 6					近 刊
日本道路公団編	関 門 ト ン ネ ル 工 事 誌	B 6	692	1500	2000	200	
土木学会編	ト ン ネ ル 標 準 示 方 書	A 5	34		100	30	示方書 条文
同	トンネル標準鉄方書解説	A 5	138	500	600	50	条文を 詳細に 解説
同	土木製図基準	A 4	170	1100	1300	150	
同	工事報告 天草五橋	B 5					

申込先：東京都新宿区四谷一丁目 土木学会